

展覧会「布の邂逅」
RECONSTRUCTED FABRIC

教育研究部会（関東）

- 日時：2002年9月 21日（土）～24日（月）
- 場所：東京六本木AXIS ギャラリー



展覧会「布の邂逅」会場風景



オープニングパーティー

日本テキスタイルデザイン協会/TDAの関東教育部会は、産学及び各教育機関の交流と高揚を目的に、今日のテキスタイル表現の場として、学生達による展覧会の企画運営を続けている。前回2000年の富山県の〈五箇山和紙〉に続き2回目の展覧会となった今回、この主旨に賛同し素材提供を快諾したのは、世界的にめざましい活躍を続ける〈株〉布で、斬新なアイデアにより深い文化と先端テクノロジーが融合する約60種類の『現代の布』が提供された。染織、テキスタイル系の関東美術系大学10校と専門学校1校、あわせて11校、計15グループがエントリーし、この難解なテーマとオリジナリティー溢れる完成された〈布〉に挑戦して、それぞれの約1年に及ぶ表現への取り組みが発表された。150名に及ぶ参加学生の専攻は、繊維に関わるという共通項を持ちながらも、工芸染織科、造形芸術科、テキスタイルデザイン科、それぞれに所属し、又、参加メンバーも、有志グループ、ゼミあるいは基礎実習でと、各校各様のスタンスからの取り組みとなった。

『邂逅』とは、思いがけなくめぐりあうこと。若々しい感性が共通素材である〈株〉布の〈布〉と出会い、その『再び』を志向する表現の中で、それぞれの再生へ向かう真摯な意欲と姿が見てとれ、予想を超える巾広い表現の形が熱気に包まれて展開する会場となった。

〈布〉から〈ぬの〉へ、【生まれ変わる布】へ取り組んだのは4校で、東京造形大学【再生〜】は、繊維の構造と『生命』の遺伝子の記憶の相似性に着目、遺伝子を組み替えるようにオリジナルの〈布〉に手を加え、3枚の布に創りかえた。一方、主題から『解く』というインスピレーションを得た横浜美術短期大学【RECONSTRUCTION】は、〈布〉を糸へと解体していく過程で気付いた各々の布の表情の違いを空間を感じるように『再構築』した。又、武蔵野美術大学【〈布〉そして〈ぬの〉】は、出会いの原点の『素』を見つめ、〈布〉を糸にほぐし、撚り合わせ、再び一枚の〈ぬの〉に織るという究めてシンプルな行為の中に、『再生』と『循環』のテーマを浮かびあがらせた。東京家政大学【re】は、〈布〉を更に繊維状にまで分解し、不織布として再生させることにより、自由で強い『甦り』の布を創出した。

多摩美術大学【ドローイング・ボックス】は、〈布〉を材料体験のドローイングのキャンバスとしてとらえ、『即興』的、『触覚』的に描いたものを数冊にまとめて発表し、5つのグループの参加となった女子美術大学のグループ2の【偶朽蘇意】は、熱により布を金属に付着させ『偶然』に出来る表情を再構成して、両者は共に〈布〉を【実験】的に扱う点で共通していることを感じさせた。〈布〉を素材とした【立体造形表現】に挑んだのは明星大学【growth】で、『まゆ』の形を『生命』『創造』の力のイメージの象徴として造形表現した。玉川大学【社会の窓】はジーンズ素材との組み合わせで巨大なジーンズを『再構築』、身近なモノの『再認識』と新しいモノへの出会いを示唆することを意図している。女子美術大学では、グループ3【再・触・喜】が『触覚』をテーマとして、造形作品に直に触れて感じてもらうことを意図し、一方『聴覚』として『音』を感じとることを意図したグループ5は『蟬』と『布の羽化』を強い生命力の象徴としてパネル表現した。更にグループ1【集積】は、〈布〉の断面の表情に着目し、手を加えて生まれた単体の組み合わせにより新しい形を『再構築』した。長岡造形大学【真空ノ渡シ】は、布の色と形の変化により『関係』を表現、大塚テキスタイルデザイン専門学校【NUNO-HOUSE】は、文字通り柔らかな布により『隠れ家』のような心地良い『巢』をイメージして、空間志向の強い造形表現となった。

宝仙学園短期大学【布の緒】は、布という素材の本来の意味性を『土』に置き換え、〈布〉と融合させて植物の芽吹く様を空間にインスタレーションして『再生』をメッセージし、一方、女子美術大学グループ4【SEED-BED】は、苗床とみたてた〈布〉をカラフルで遊び心溢れる表情にアレンジし、期せずしてその『再生』のテーマと発芽や浮遊する形を同様にしながら、両者の対照的な表現が興味深いところとなった。→